

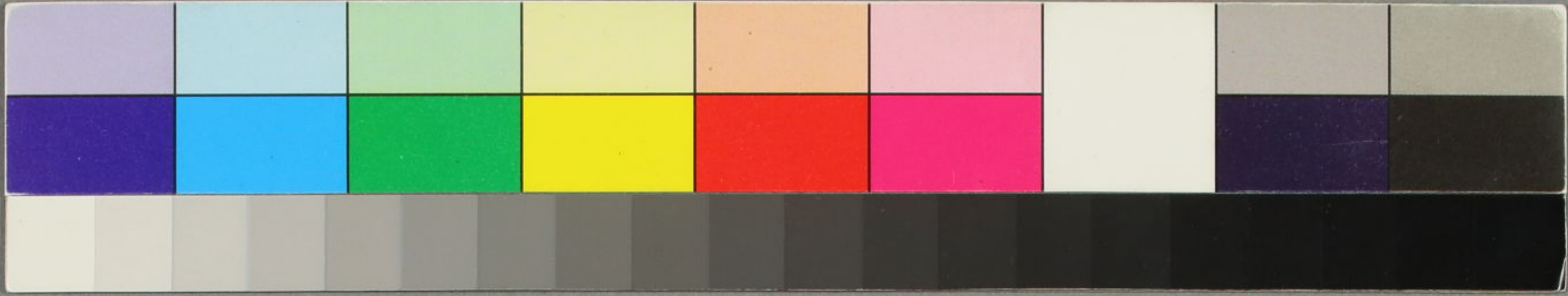
貞真式海印錄

填字同字
字去苗辭
于二千八
体言用言

五

^ 5
1117
5





5

真皇武海印録五

曲意詞述



填字同川 然不極

夢三玲廉の打状と序の麻子の正さるるを吳
 体の字おといひて執事及公名の死を考し
 吉をり候字を極束におわれと今は候よりて
 考る候字も本美りも極束におわたりたは
 大衆とわくまを候名の考分も及まぬ子
 かか考 カツホくは声ニ号タリ良果八候字
 やふ入 ヤリ用ヤト入能用 昔又藝八候字
 さをとめ 極妙女 子八候字乙ハカ十連
 たおえり 棚機之昔衣衣女ノ通林七夕八美洲
 いまおを考 否沼之ニ神已合玉フは白指身八候
 きのうそ 莫告其之 神浮藤八美
 志のゆめ 篠芽ホト明白は下之来を八美
 志をり 志八候字 枝八候字之

カイ印五

一



唯名約 踏踏草 月八夜守七八月打成王不苦
つらふつまきり 月を月影く 鞠晦日ハ美
以介頼き異件おも 誠不端わありたよ
あくる何と推てる通せよ

山夕

時折

皮

注

対

所

形

百仙

を夫ちのらせしおしのお 栗儿
我とわおと八るをと流る子て 东相
後家のおちよん我とわとちち 太龍
福山の麓の追付四たうあ 蒼木
御座とるの障敷すく 支考
つさもあんだぐて枝き裡たあ 乙揮
まよおし起て障敷の目もきれ 木枝
隅のむくう手紙届る 十丈
よの中乃跡きも考ききり 牧童
ゆき後よ世む形く 卯七
よて来う今夜の宴のしふ 素乃
月をたる 其の持合 一介
形くよ千代の始や葉のむ 昨ナウ

キ年

有

梅十

中

星月

目

金勢

口

コハ

年

中くむううよほも三 猷 伯名
月よ中夜波の風吹て 甚二
いお郎の雨よきつくとまきか 口カ
持ていつくともあききき 占ホ
きうとろ男は余程もあて 乙抄
まると牛とん中うんやト お替
植をる五町五及乃田植版 梅光
中人乃口まかうとろそ 伯楓
木陰の月と尻目よ面の内 泉石
葉のあちの枯やうま 松田
将老の役目よまきうそきき 而后
口ぬきき方く 結納 山夕
閑れとろの意はくもや 仙芝
杖布を捨るむの山口 青原
手成思の提よ捨る版時 并六
孫秋よ仲費さくく風吹て
ひのちうたぬを又の千代尻

月

手

夕

辰

崎、松もまうたきく尺 友友
 徳りもぬくむねのききし子 王夕
 捨手厚と又子小展風 似翼
 独してをを約き一 言敵や 号那
 等のもとすの 落のう 粘 栗敵
 梅は出て初敵や一のむの時 為

□同字ありは不嫌

又云世分のお枝よきうとらふ教は是を秀洲の
 矢おといひて執事とて其の字形を心下
 ▲秀洲の初は信徳引借よりそりてもイ件は裁
 を種をぬるは向うは向うとて其の分るは及ぬ
 るは大小木木のまき分るは向うとて其の

枕

枕

枕

丁も大るう一屈也く又 源紫
 眉作の姿似よう一水鏡 法子
 大京の御座アエ久一き 三抱
 秋をれははりきるの太鼓橋 勢士

夕イ

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕

夕

後の木よは後おす一り 昔粒

大毒の及魂身を花乃重キ角

大工うよきよ捨一子傳 比誰

お休うきよとさきあははを 以之

おねとくくも大体のち 花把

約束の小舎一控妻よ来て 子花

十りもうりのよきく出うり 子花

母のまよは路智を面白き 占ホ

又孫お守の曲のる士 立心

拾のきぬく 捨れおの月 嵐者

あそある木のちも風ちうは 初む

臣君の楽を今息一 林子

柳小木も仏とすい又通 支考

柳の木よ通訓る角田川 牛袋

あそきぬあう母とお文 占所

柳木もそまといも守は 宗常

拾	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打

拾	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂	穂
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打
たしりく	田舎	後	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打	水打

む指 妻とすう山犬の声 箱

ツ 庭治う大勢寸極妻の丹 水

化 山崎の傍ておきや書む 探志

多 書とすうき 洞乃 澤

上 山崎いざの上おのきうて 正秀

小多 赤くう神垣の上 昌房

月とえて俵紙帛 陰帛砂 幸角

鼻考て表の位ひのまひさよ 崧吉

盤洞古き跡の檢口 宗福

八幡の町もある水口 三光

春中くのちる子をかきる 松見

春戸一どく山く及 徳水

お備もある祇まうん入 和

箱入てやうて帛 西尾や 幸平

吉福天女も足袋の目 箱

吉店エカうき 天空のきね 信孝

のりの声乃 四や天目 支考

あやつりい音白をそて 天龍 座屋

晴嵐の花のさあう 大母口 幸風

まろて声をもろ大文字 美秋

裁不嬌笛字

合り△₃ オリケリ名止、₁₂ 尾尾 きくくひふむ

めめ カハリニモ同シ ぬくくきもありあるれ

うう トク れむとらむむうらむとらめ

△りる三遊尺 多依者

階のなつ目より 八ツ目より 箱

ゆきの谷より 五合あり 幸

歌子抑うりやせのいなり 箱

極来てよき店をたれやう 洞竹

えりきききく浮世へうり 去来

乃ちあき畑の地の花さうり 文州

白き親仁お屋村上筆をさる 箱

源の火新頼と 射り 角

新々凍羽の狗を別れり 丸

次句 砂

カイ印五

我々苦留りるま

茶

るま

何れや〜 泉声てやの 後水
お路の出供さるゝ腰をる 枕支
あつちめう 仰山と出る 枕後

おめおあまをの及うり 信化
まゝら子いゝん目さむく 小枝

低

り低

借巻うゝ身加の性さ付とる 林取
裕造て 葉ふゝい 笠 句書

三茂ハ
オタシ

くもく〜とて何ちも志さり 枝
笑てすまん 及ふのれ 枝書
おあまらうちうゝ色の晴さり 玄

加〜や師甘はれて哀あり 神取
れたの侍り 推人の月 嵐書

句見

弥

高の善教人のもさびさう キ角
田上麻々 麻いぬれて笑〜 小我

心散のおせ白〜とめさうり 叔
古き良是よかち人侍る 林取

月さるゝ頃博の急務なり 母去

ヤへ

りり
るま

に事を推出〜 林取とある 示右

鶏籠の口押明て押さうり 一林

来る人あ〜と女書とる 去

舟中分あまの屋居は切り 林

ま〜〜 指を拵てちり〜 嵐作

ひろそら〜お軍の月のさび返 史邦

小文

る低

八羽の月代初〜と〜む 山店

山つ鹿ちの角力勝り〜 都

林檎の巻つ〜指とあ〜時を 店

す〜と〜を引起りる 竹

△^長飛^作〜すひふちつむ^長め

ちさんひ〜くの港拵〜 支考

左酒〜あ〜ぬおの泥掬け 及止

日と照さ〜〜と教も〜 及朱

程〜あ〜山路を〜 固友

林の中〜乃家〜大さ〜 乙由

お百

くま

き
業考

質工繁の奥をわけてき ト
赤行の四方の星乃むへく カ
りさの妹の眉虫に由き ヤ水

その高台の傍を打取き 乙
皆このまをわけてむし 乙抄
弓と矢をまといふるは 乙抄

文の先三史又遣字如し 口通

片深押やむるの精森 遊刀

押くさるを路にえま 昌彦

奴くく挽棄て棄てぬのめ 午郎

去ぬぬれし小まきうのむ 乙中

うまきう上の晒をまきう 蒲原

さらくくと奈僕の故に命にま 支彦

口上ちて返す あり業

氏神の元もまきう 候 掬ひ

肘る山崎 今をまきう 牛車

並竹のまきうまきう 候 掬ひ

ふ

ツクモ

百勝

つ

復

む

辨

め

印

き

持持の雪にまきうをまきう 角

その白の狭帯に陵よりあふ 周持

あふるとまきうはる花のち灰 牛吹

市の喧むのお人矢子 山原

痛うふられぬ女房えりり 若

あさ口は清い月の入りり 若

あの花う枝むらむら 若

かりかり肘の爪を凄む 高河

三証の念仏まきうの杖の尾 素後

使をまきうにまきう 若

おくの星も果に照らすあ 菜水

まきうまきうの孫娘のまきう 河菱

仙人うまれの尾風まきうを端め 赤白

△秋まきうまきうまきう

辨まきうまきうまきう 若

長生に辨文君の思懐まきう 小枝

術う禱う術るまきうまきう ソラ

きりもあつた

夜を擧る月の小くつき 相宗
 立ちし何とぬの意のせ 若
 まく月の足ぬ所のちつき 舟
 書をめて之秋を人床一 又石
 まく夜をく入ねをつく
 町もくわらわきまの黄あし 示右
 つてもわをきすれいふくも 涼ト
 廿房の只 家のをま 柳江
 実あふれくくといふも 林角
 念仏上戸のわをも受ても 色身
 白川ときより白く椋垣
 秋のりくをとう捜せとも
 △あつたつたれむらむ
 籠工がの声い守あり 若
 一葉して月をまき川柳 号那
 印履は危根く村を杖ある ソラ
 月の中をくえやう擧る 妙経

乃ふも亦何系咄をうく是 行車
 表のをうきせけあり 泥士
 為意して枯きくを苦られ 若
 綱代の船を市の念 珍香
 舟の形ふよりやうう 斜尻
 初衣をきくく力も言れ 紫
 釋座してつむ舟を運るも 若
 け丁舟の隈あつこれ 紫
 燈臺の燈をひく海くれ 乙刃
 所のおを又喰さうも 赤白
 了士の床去りて立ふれ 小枝
 膝下の田町やきうをむむ 目下
 陰陽と又中も 嵐宮
 忽ち首つさうく飛費む 相面
 凡や枯乃初春をえむ 致登
 孫ちよ医志の匠を待てむ 久人
 春はもえあつて是はてはらう 杖傍

カイ印五

八

花 花

梅屋よりいこいこ似るむ 占本
川邊切て草葉もまじり 月本
物葉所何ももろもれぬめ 占

△て田茂不盛 カヨキ 占八三三

次句

花の木より樹ありは外よ盛て 花
花のほ水も草葉散くむ 揚水
若の身之何と松葉も是こて 五角

去

頂うち行の帷子投て 五五
各候田をいこく 力号
又その林よりくも出約て 季風

久

梅屋のちんさき草葉輝て 花
名もいと地下と立命り 花能
花の別る中のかくく 花能

風書

新の葉茂る中よりあて 土芳
その葉山子の弓を矢子 土芳
花の守仏の石茂る寺や 良不
月星も花より花くまて 柳如

白松

花のあまうさうさうこれぬ 一葉
上手とくさと医志もあて 白柳

この

使との花よ妻の袴もて 花文
葉てそり草葉の花 花能
門先は傍む松の影めて 風文

ての多用ある花を許されいと是也力也
七不出るは捨遠三石仙も自他は集花つと
倍表紙おはる初節外外候事

拾

△は田三三 カヨキ 七五三三
長き板を伝るまみの老きけ 花人
下んは生ま白の伝けり 如行

昔

ちりの中へ月の花まよ 琴風
山とくまも花のおくよ 七五

流む

草の原や今乃あまよ 才は
居るは花の替女のよまやよ

花置

あちもあち花も花よ 柳士
花置の早も花むちりよ 只竹

△ありあめ カエビと 七ノ多者 ①

子

ハキリ

第木に存ぬコ生て茂るコ 氣

為

禮のこある 裡通こ 口力

申

出筆賣の 利の僅之 佔ホ

白

裸て居つてうまきりこ 昨古

音

あのうきりの面白き之 凍ト

ソコ

ほの競は 麻をおよこ 許云

後橋

立廻ても 庄敷をくこ やハ

山

左玉一也けい 運んちろこ 神句

ソコ

籠も店へ出さとりよこ 凍水

山

直傳子よりむすのんこ 穂之

山

会志そちの子を運く 白踏

陸奥屋のまのを男たかぬ之 窟青

お柔やの松上風さるくこ 浪化

手よれい芳てあだい太美之 六之

京の吐り 久しきりこ

△タリあめなるあめなるあめ三去 カエビと

ヤハ

ハキリ

月入るコ頃博の之勢タリ 示右

、

舟中分由き居居上仕切タリ 一林

、

たもたも 茂さきタリ 丸柁

、

皆白体の襖くタリ 古

、

雪白きち素おるこタリ ヤ氷

、

鶏頭て大博の傍に入コタリ 旦多

、

自遣のほの幸ふおタリ ソラ

、

むの息室の隣上居セタリ 口通

、

蒜くらし香コを扱タリ 籠浮

、

はあちとある板を扱タリ 一井

、

武士の双巻とあれコタリ 揚水

、

ん。の。猫の月をそむタリ キ角

、

他のきちんの甲乃凡コタリ 小枝

、

伏見の月の昔めきコタリ 牧童

、

三去の伝又高コもあつあつあめあめあめを 推えるコタリタリも皆三去あめあめあめ

●ちむすめ

△ちむすめ

カヨロ

和

初月や先西窓をさすむ
おのつし屏の松を眺むむ

初
斜窓

一

車ぎのるきるまを便りむ
木の白き桔梗や英其隈む

言水

拾

中翹枝度霜乃悟くむ
は島よと合せよと持つむ

言水

古拾

に井りの宿り高志をむ
竹戸柳あもる宿やめぬむ

言水

川屋の杭木や新の傳つむ
浦島や橋おのけ悔むむ

似美

カヨロ
ハナサレ

麦飯の井や室に震むむ
投ぐく金鼓山や又つむ

言水

笏を吹田のち作いあむ
産出寸と又苦地もあむむ

言水

△ちむすめ

カヨロ

拾

あまの年七人うくむ
あ

今

今の乃く我度去るく
抑枝の草乃朧ささるく

イ物
夕我

我

平田の仄に暮るまあむ
片下るとれ一雁伝う

キ角
園友

夕

暮るを海く杖て出く
暮のあをあう伝く

一故
栄友

冬

と寸小為新のまはる
月々けとあれ一屏の歌

白
彦文

長句の何多かれを考

△ちむすめ

カヨロ

三

さうらうてめつと後身も持て
用心のつらふに極まやむ

言水
及朱

七

あつる時言ハ下も新く
紅の凍こ 只もきれ寸

言水
之伸

反

今もきねえ 恥もあむ
金布ももあは忍く寸

言水
支考

カイ印五

五

とせやうきしんりや

三笑

宮よりの日のまもます 枕状
傳子の光ねもねれす 昨古

了

おしりの天窓の簾もたま守 之乃
をておく合おの事たりや守

伝吉

戸前の障いあをねさぬ 廿端
笠の上ある侍着さぬ 喜家

傳

△とそやうさほご苗三云 〇
葉小枝は葉の十徳のそんろと 去来

白鳥

る部つく津の秋のそんろと 妙喜
大禪う小禪う喚へ伯らうと 夕市

去

柗舟の即く柏子よれく 半中
ひくろきるも孫の二ツそ 次人

白鳥

暖分の葉よをき白まそ
世中の今乃目もい事おぬそ 山嵐

や

つらけ口たき止うそ 乃丸
松原の東進子の面白や 養守

夏

んもとあき医妻の美さや

夏

面白の拾女の杖乃扱すも 翁
相織うゆをむる 梅や 桐学

夏

あんとそあらの花からう 南枝
久大時分うるて登るう 知え

夏

月影も空く清きおの長さ 洞介
咲ちきる湯のあさの短さ 支考

夏

葎う葉の簫を堀ゆ 唐風
乃ぬ井戸いけの短し

夏

子供のろ寸はわをま 木竹
角のおちよをて来す 何空

夏

△秋まうあまき苗三云

夏

おまたぬ候もとり 立志
扇窓紙出つるもあつ 凡

夏

去中く乃の笠もあつ 氷
き寄りのえはあつるいそ 冬又

夏

人まの袖も返りあ 先之
番ふ中も似るあ 澄吹

夏

信

カイ印五

三

西去田もあへよを分比

壬

尾上之廣つ木果たうあき 松市
匠てあふ子の敷のきこあき 柳敷

△もあへへ一苗を去 カミ

大炬きくれとま候もあ 末後

概乃あも松杉もあ 正位

山科よま引やむ厚もあ 庸右

捨うと又のやうあもあ 昌巴

乃あふ敷よりあもあ 是通

まあとまうく上いひもあ 吉次

市お出ぬ日たえもあ 巴今

吸おあんとする際もあ 枕危

あぢまの箭さうぬ祖もあ 匠美

存よき一のいもせさく 園水

あ月やあて送と鳴る 桑柘

△よをふ分比を去

た毛をあへ一の襟たう登 牛角
狭の弓た種き世り出よ

栗

又

銭

柳塗

了

り

壬

新

梅十

三笑

ち却

水仙

流石

教

梅十

老

赤のゝあよるを後せよ 下

あをかひの茂ともえよ 木

射の形はよ後のまきよ 梅支

月拾人のよあわ自惚うよ り

松君をあされいとすむるを 三

死ぬるをえてあせぬあを 伯免

うき涙ともよそもあきるを 一

念祈をもつてよ下い山子 蔓花

のよる誘代男のむのけ 兔白

△哉苗 お去 多病者

川そてわりのあやい梅うを 高占

方おあうよ手れいもの名不い 若谷

髪はあ乃 中小性うを 石

言ふその胸をうくくし 角

あせや杖つく梅の老木は 二

梅十 梅十のうらうあめまふ 七

カイ印五

十三

一橋 去ゆく二頼悪あり陸子 開夫
きと根よあさきくう子

桂太く文科丸の京中 十去
約よりくくくをん子ち

十七 煮むより号よ又女子 煮占
茶のまよとあ守 輝子 手

△はがきくらし。そあうう角打去
禪別衣 おもくをり 翁

夕テ 煮くろむをぬあつ ソフ
あゆみのる合二間をり 感

十六 面白く柄一月てうあう 紋車
遊覧の遊いたひとまかろ 陸奴

あ 麦を煮むおわれぬアあし ソ手
田長る海一候を守りし ヤ水

三笑 神よりあの高季を煮てアそ 煮茶
コウ 寝い袴も 煮コ こそ 古笑

浪 ッ子信もあきれぬ日和くり 昨古
年の中申のわんくり 梁之

△短句てめま浦カ仙二百句一三

古式よ下句のよめて浦も千句も只一と何の
たあるやけおの辞もあぬせんきくあれ
二界よわといふ人のあぬいふぬを守く

△短句の上浦てめ古式よ一屋一あれも煮ん
ま一屋の百句一之い作りてあ一屋あ二二屋
あ二二屋定い煮んああきくく煮ん一屋一

は二二屋のああれ何席よりて潤も一之又始より
二二作さうおおまトカる句二カ作り又
長句のてめ一煮を許す一何あ一短句と

制すつきやを奉る候の中信奉位徳方丸
似笑よ一古個より出て新二陸煮ヤ一人
短句のてめ二二も一てあ一先け人

後くま一佐凡子よりく煮わく

化字子
百易

て

天孫

次句

一又反

一三三
二

一原

一

比のきりかメあゝ一志て 伝孝
 安よ乃去是も 是とて
 三夜の笑のうゝと持て 竹槍
 梧桐の夕一陽子を抱て 似去
 八声乃月一室を揮て キ角
 道世のよき一妻子歌て 翁
 一は秋 糸をねまて 方九
 子母の衣を室一脱て 角
 おい 畠一岑をうゝて 夫
 殺引 掃まきそ始て 翁
 たを 竹槍の吉世軍一 翁
 うゝの 天下 穂一 去
 西の 昔もくくのこゝ一 翁
 有まきの月一いゝよき一
 夏お 不ばもいそやけ世一 夫
 う 鬼もい 隣あり一
 は 何よもい 三句去とん也

新

大注
去日二反
ひよノ

あゝの 一 救乃 似石 扱よ 角
 あゝいゝも 救の 仲も 扱よ 仙化
 のよ 二 不ある 故よ 二 反の 乃 女あり 節の あり
 二 反あり ありよ 二 反あり あり

△去日の一を字の字法 翻の 一 反 百句あり
 る七ア 傍ん 深一 弁一 一 人皆 古 枕を 扱よ

△ 伴字 苗 カ仙一十六 続

拾母之

新 尾 根一 あり 一の 板の 底 相 紫
 二 百 連一 一の 房 札 竹 槍
 た ぶ き ひ く 後 小 声 の 男 同 士 三 相

泣一 他 他 の 人 新 紫
 竹 槍 の 尖 き 月 の 夕 一 鼠 楊

春 の 実 ち き 四 牛 の 嘸 翁
 手 ぶ っ て 音 書 あり 関 々 木 紫

か ち 人 の ぐ り ぐ り 音 痛 老 翁
 為 ぐ り 音 字 乃 音 紙 の 屠 翁

大 白 一 一

碓のちりの合ぬひき子 葉
 ぐくと解るる所の枝ん 枝
 否言風をうつくま下 葉
 むちうてきき足茂の角橋 葉
 乙名の泥と為守肩衣 葉
 出代の標に控る持草履 葉
 多の目あしこる風志 葉
 △てこそ易カ仙十五流
 曉の新神と引控て 小枝
 房紙一をあちうと控そ 八字
 鳴わいささる時いささそ 枝
 多のきりむのせよらうく 万子
 障梅うすれ月利の連りり 字
 子おぬう 枝
 多よりも志をふふ親に似て 子
 三世おのりあをぬえすも 枝
 字なき紅のねもまきやら 枝

新イおたりおたてあく 字
 多らのおこのユ更あうくと 枝
 子供うす取るる由く 子
 松の木の子あると町の名も 字
 死さともいふ所さともいふ 枝
 三世の園と月とを扱分よ 子
 十の目下控るる何れ夥しは二偏をえて句編 子
 仍名属の時に才之字属よすは癖位を止す

□お合辞

昔よりお合辞はテ嫌ふ「才」の属「は」の属の中
 五の属「は」の中「七」の属「ハ」の中「表」の内
 せうり長より短へお合とて同辞と嫌ふ「振」の中
 とう才の属とて「振」短より長へ「振」長とて
 本式の儀紙に二行を「振」短とて「振」長とて
 あしと表とけを降るる古今同式之程已下ま
 治守「振」短とて二行を「振」長とて「振」短とて

終さすして

杖の目尻

目より

まうるたて

△終より長一不煙何

終さすして杖の日の終 一白泉

目より目尻のまうるたて た化

△表にお合を許る所

お振る尾に石をまわられて 木角

正字ちやとてあて納る 嵐考

陽冬の内終るるたるんは 石考

持さる方より月ひらむく 村終

木終るそもく人頬のたぐい 岳考

長押の陰より氏と急寸 風乙

けりる年式ありぬい若く寸と急也

△祀已下お合ふ煙何 押信の跡まの口を喰くして 石

て 尾に尾を付て世守に節 ヤハ

印 三考 筆末の木角はん角おて 扇

拾 若くは七の孫を拾して 川

引却り相の終るも手えうそ 丈草

焼版を別る中のかけて 支考

目尻にて出ぬくうり 木考

目の出やうの何まい 舟泉

んあけいむり 木

丸をよと曹同字のそくうい 木

世守をよいにくまをやく 彫業

は木によきおの甚考 石

よしもよとくう椎の黒石 嵐考

茶小紋は裾の十位の人うと 去末

舟考のさと杖の末まう 茶

秋 懐は揺揺さして又出る 胡及

下戸を閉める言の秋乃亭 カ号

季 おの家いもう秋風を候くく 以之

了教あくる 門の竹垣 荻戸

雪丸 燈おの香を曉とまぢりる ソラ

瓜あくる 刃去のふ 川水

た まゝ止め高あ戸ぬきあくる 苔葉

さー残くる 世翁のまき 夕葉

□同字付の不極

蒼ろよあ白の意を足して分白するなよいある

字も付白を嬌守但月花におよ限あれい付

らま守更余の同字をよく付らまま物とする

夕 一代よ又とあるまふ人あまや 井炊

兄 山大名ももまきしあ 栄友

、 植いこそれと身のおの花 正同

り ちこそうふまそんまきまき 白鹿

みの 三日月のけおまき 煙れ地 笈月

ま ちり ちり まま まま ちり ちり

あ ちり ちり まま まま ちり ちり

と ちり ちり まま まま ちり ちり

雪丸 瓜畑ままままま月を足て ソラ

夕 アを向ま葉乃畑乃 川水

六のまま語の部まも何あれい定ま田書す

□多用の辞統不根

あーの記を用る草の戸 芳香

さく日よいなあまきつる花の陰 下

懐いあまのりああ陽を 仙化

残る雪残る葉山子の吹く 朱弦

静い鼓て懐をとる 尋 拳白

居ちう眠とうつるお胡 千り

元くる眉を隠すまぬく 菊

けい候て哀まああ痛あれや キ風

は外でよをまのともホの多用の辞は残限す
下ま奉る残残不極係の中まあり

△三尺成並不嫌辞

△てよをえのととモる。△△△△

巳上の字教於上申下

並三尺成力仙一不百

句一字をうて二二不え

何あり二並成いなきをよ同字もあふあり

△三尺腰のて腰のよといふるん七の低句に限て

言句の中より又各あり或いれはきけんの

ときをを使ひ向より押字もいれ抱字もいれ

れてけりなきをきくされとお成りけりけり

名りけり拍子も用寸尋ぬけりて不のぬと

も助て辞の指合いひ声は倍後ありきたり文約

△三尺よてよをえとむさぬれは成也

けりも極さるる下二ひく支考及の何とそ

もゆき支考ありはあてのけり自他さき

引くよ一辞のむさを極よといふるも然とや

ニツて笠する鳥夕なれて 相葉

吹きよ袖をもれいふ不記 叩指

位馴て目まの寝の浦傳 業云

まともりの杖の風音 自笑

捲くひてあふ麻よ存なき 如風

降ろりうて暮を運さす 女我

月高よ寸切をち察伝 窟寫

團栗枯て抱山終りり 神教

二三儀引抜そをのねりき 我

ろよ守れてあふ盗人 千角

大考の川幅成る向風 叔

一本を焚て仕きく松方 雲

抱の木よ通し列る角田川 叔

あきさぬあふ母をむえ文 估抄

河木よそよあといふ寺立急不 桑常

襖の袖くしたをを多ひく 葉考

お虫よ侍子をち一子の忌日 叔

三尺
中て
白兒

上て
鳥

皮
上よ

七三

てよとえ

五秋ハ

紙矣を拂くとほる初ノ 一角

夕月と新むる味で標とる 八水

かろくも打す悪く標ぬき 所

賢けりま分借一 大後 常

何あて為しては笛のさや 固友

船及に合良ききも一 八水

又さするをゆく 壺笠 水

幸んまうむせ返るる 菘布 所

近所の為所は 洗言の脊 史邦

弁南の菜を只おく石の上 本彦

流しききと鳴る 極子 嵐葉

にの所のふとふ 思う九くわて 翁

おしく中よつ つき足秀 岱水

月そてるの隙やむ 早と所 邦

まやの儀は 本めく 川豆 翁

中をいぐる 同辞 続とる あり 彦

彦彦

廿日 中よ

廿日 上を

孝子とせけり 栗橋の宴 翁

松杉を挨拶する ちの門 ソラ

おりのををき 一 砂の坊

界の供花の思たもつ 一 ぬ 口通

上る小あひをき 守む 谷川 友五

美き方の隠者と 守む 目録 苦翠

表のふらりを 悔む 子の子 通

保えいあれと 平信は 只二巻 伯老

りあのおろく 強と ぬぬ 松守

神心ん 支えり 一 世の風 秋函

は山伏をき ぬぬ おあし 九郎

新宮のつらも 月秋の 旨妙よ 五角

葉のつらも 一 松の小 翁 山捨

柱柳私るよ 月出 して 一 卷

糸の籠の 柳弓よ あり 一角

誰うあつ 帯のきき 一 守り 彦 隆

に目中を 舟の 葉合 大町

廿日 中よ

廿日 上を

廿日 中を

カイ印五

三

●のともる

根

身

上の

今更
上の足
今更

柳
中

表
中の
表

三尺の短は小あもは形はの男

たやゑも母を情むは手

幾日の戦美と足やう寸

おれ水園を捨ぬわうた

白雪の夜部 陽立の十中

又破破のあふさめりて

流の直くうる黄昏は

柳は桂の竹の子乃甲

二十の契をあやうは格さうて

又いそその犯号振し

忘めて月を流るあは振は

都の声の仁を流るる

ひるささあそや杖を好むむ

風は一葉の男丁をあふれ

よめる振いと伏の 龍

市のあふ日店先の静ろ

キ角

方丸

コ糸

ソ巻

信風

三羽

嵐雲

支考

正秀

地巻

風玉

泥足

お有

甚二

有琴

七馬

お花柳といは何も子油の寺

舟をたたくと響のちやく

西の地杖も極楽もある

き声は月が文ぬ浪花橋

陸今人もおのるさぬ

芳く親れを思ふ子あて

いせの世もあふる守く

正月もあふるをうては字さ

孫よあふさむ虎の懐

入おも隣は花の旦那ち

蓬は杵のともさう合

出代も荒らう寸の笑子

大工のいさききうくうり

偏柳もあふるあふるもせり

抱むは又あふる杖の風

春は赤子を也すは防主

花子のあふと又えらる土境の下

お哲

梅史

昨古

琴之

二

古笑

橋東

りお

嵐枝

柳コ

キ的

枝

お

的

谷水

史邦

史邦

文
音
よ

三
笑
カ
カ

教
下
下

カイ印五

廿二

細き井備をよる若あゆ 霜
 去風よを敷すゆる振芝居 嵐葉
 園の扱けの面楫の声 去来
 流すうおつふ月のお人 桑柘
 秋の寒きをむくしの杖 乙抄
 冥入よきまのワヤ田毒して 史邦
 王をさるるもの足 泣
 押別て大よれりあふ候 示右
 春加よ切る僧乃首途 若

△折枝並不嫌詩 〇八五下

○^履寸ふすぬをいへるもまも

竹の子あす穂乃乃乃 涼紫
 鳥あらしうまのさきむの山 涼紫
 去風さくす谷の細布 徳子
 枝々序はおろ寸椽の枝 百青
 日は何り能すよとふ厂 山見
 月よらもふ去とす寸椽の息 交由

ヤへ
中る

松白
中る

夕
下す

未末
中る

花
下す

心
中る

枝

中
中る

夏前仕ゆさうこの赤風 若
 色さす寸杖よ不きき禿も 嵐号
 おくやと葉子危のお程 キ角
 二も人草えも果さすお出て 来
 仄打とくくくもぬ一枚 凡兆
 いぬの涙も又多す自由さよ 若
 刻もおさぬ仏垢つゝ 萩子
 初花の極よ古竹結ばし 一物
 月もくくぬ月の新さ え代
 狐をつゝぬおときく 仙雅
 云くを我又おりて夢さ 爰小
 大徳もあれぬ他世の時 不柳
 集てえくれいちまぬぬ 白根
 雅工日雇い雪踏 扱扱 赤根
 若代よあれい賃も気是 理瓶
 春もねい何やうい配合 扱扱
 扱扱扱くもぬもあま 扱扱

白^ウタラ
中^モ

海ろとすれいおありきり
よの中の程やう香てむの奥
懐てま人のいほ子考く

三^日

出て勝れい梅の川一不
海のおも山より香ておの月
そわわられいア乃れそ

忠^心

忌替れい海おききまお
奥の庄おく捨居るく

風^表ま
上^れ

花あれいむさき家も止れ
田西むれい海のおまの守

拾^中

お乳席て煮うよおやまぬも
只跡一いまの玉之

糸^辰

ソの日の障子張一人歩怯
新むぬ守角入てより

ヤ^中

たの草種まいしうなまれ
かいう在ふいへる区画

商^下

余程郁く乙名の来り
衣さをぬきあくる又の来り

教^中

何不とあうれ弘らる中危哉
門外に堂を控ふる天鼓も

一^橋

帷子もひきまふる八九月
唐は括くる帆柱の折

白^扇

十二年先の下を括ふて
メ出される吉原の王

山^架

ソ。取ても明てあふち
乞食の心よ多きもさりて

人よ同てもさしいる月
軍もひきまふるさきあめ家

致意 口通 是 固方 乙由 考 信風 仙座 風 車窓 河信 嵐妻 又新 巴兮

● だら吳歌

△ 歌並凡ハ三枝不極辞

のり 呉九類 土イカ、イカ、ナツ、トク、ウ
や 梨 同 氏 傍子 物 歌 辞 下 あり

り

仕振がようて屏も格も 痛乃
悪谷の隣に白きけし 畑 宇麻
借か来とやも戸かひやむ 素冠
むくもろいそれて思は後向 乃

セ

不化窓の下流が芝借れ寸 李仁
奈空よひく空宿の川音 園石
着てあやの立拂は扱が明て 南取
大急おりの松のちをくふ 加徳

白

お代がささるささるある仕とを 以之
お梅とつとも大伴のさす 左把
薙舟が戻りもあぬむの中 麦士
卒もまゐる目も涙も 呂杯

梅十

まおを舟に昇てむき月 梅光
原も胸か舟て来く りお
いさるをこまの果は風あり 奈友

拾

一かよは代の一 肘 翁
泣く来る松原の芳さ 工山

三笑

談交の待くまちさ 琴之
喜強弓り又守喜田の茶の我 杜妖
高屋うとして舞お子乃 甚二

笠

坂をあふうと披寸指柳 广三
名月の他を遊子綱控て 取

魚

世病とくう松乃下臥 席岑
橋の甚くうくおははめ キ角
目あ作う志のふ山 弁外

拾

其虫いさうき身の情あき 三羽
笠たなくまき肩の勢久 嵐高
いつともあアの度たの斤遊 角

カイ印五

● 花冠

去
十一
十二

曉いよ車 由く柳 力今

鶏頭て大津の傍に入らう 且多

何やらきくむ我玉の声 秋人

凡俗の始や真の田植身 菊

いちこそおて糸没 草子 号那

水せきてひねの夏や雪もむ ソラ

庚まろくや申をまろくや 筆花

出守くみ思いすすの内より 田入

れむ使や 袖中より 彼那

愁ぬ舟や 悟る仕ゆく 家那

暮まろくおの哀や八代聖丸 キ角

糸よ製ゆ衣や山屋君の良

意ゆや 伝よ志あき守附 キ角

去の舟より 乃のあき里 号

長きや 子き伯よ 志あき守附 昌那

筑おや 九十九瓦の女一人 之那

巴うち人をいそぬ 計ち 之那

灯火や 月も出らる 男方入

三とちの松のこきや 細々と 陵格

お月より 和候の又の土用干 五川

席余や 尻も居る 五夕

淋しも 人や 又もむ 刀お 角

後々 徒士いらく 神笠 彫業

棧造り 志る 浦あれ 書山

待も 只あれ 志る 味名 角

おの人 足もや ばねは 渡位 業

まろく の 苗や 布袋の 夕涼 志川

揚を 志る 六月の中 支考

秋志の や お山の 渡の 舟も 又て 捨石

杖風も 志る や 指も 甲の 志

甲を 捲て 志る の 月も 志

おむし や 志る も 志る も 志る も

あきく 志る も 志る も 志る も

去五 不白は 疑の や おて 牙の 口合の や 志る

カイ印五

五

合新

白兒

和花

イ

日

アコ

あ

教

夕良

帛

去

を道すくまきもて轉信くくう約

はやれ精守皆教く同体やも茂極ぬあま
車も集もけりいふ方の先業平白あるをま
きむとあはま細きい轉信して言をけくる自
賛をいつのく持合あぬあまき道と云
とれと吾利の何よ美を拵て人惑せあり
まの同体のやりのあ茂の種いふれと云う云
ての平白あるあは陰るやりをぬき顔信して
言を付するはふあれと支考の二條 陰る方

△上下よかき不極辞

飛とよそむらむ志くきりあり
るあやらうよりうち

舟てあくと自悟さあじ 占木
隣くわて大をなて末の 子サ
又らさも仏の願て地を照り 丹
まうまの連を表てあらふ 麦士

山

山

山

山

山

山

一昨くも雲の板に産をす 風草

念仏てけり市の藝文 巴都

をわても勢れ源一喜る 右都

三十年のさし木花 六之

ふ笑て夢をおれや奈破 白狂

山家とくくと十を足陸で 栗儿

吳足飾ぬきの武志 ね

くうるまききい合いほれも 車相

美れれと俣こかこそ木持れ 車業

小亭の及い物々乃理や 民杖

八朝に狂馬きと月いあ 乙由

あのりき又上考の仮橋 支考

五去中田中の松のあちま 井炊

おれい物い化されとくよ 除風

時食てまみそ何も否く 林甫

度い綱を下して輝せり 里田

あらの家の歌りあうそ 白庭

●ちく

トテ

むもちるそよ夜てき不口 之白
重をえ者ちく隊志ろり 鬼費
いふ指是い妻そめてこや 手

去と秋
む

舞年の利発を町は弘めむ 吟山
手直の所の幸もけりりり ソラ
月も今書と又むるの市 孫

拾
ち

誰う使くむ碑の銘の意 雨相
若生を枯木のむと極保て ラ
去の抱う母夜くくむ 口通

あつ
証

初喜いーきき思を化程む 翁
夷の衣をぬひくそあく ラ
町く志めむ丁を儀と生をて 不玉

み

お友の忍布一回もあつむ 志芳
木をこあつりの言のうれ 風妻
美産を又せむと人の辱て 翁

ハ夕
む

兀産を張返さむと持弓 才人
約も向の明神乃あ 乃志

真

夕暮は牛房ひらむと燃れを 芭二
東風はる琉球表物一一く 支考
切まてくる小田のあ書 呂丸

あ
ま

歩まくるの脊ある本博の毎 不撒
去探のう作の悩の思一一き キ角
後子うりる舎二万あ 茂人

拙笑

いとをき子を他人も号り
帷子も風も海も中下性 り車
町く返さるを黄昏の文 角

秀光

さひき時内て小神の 智矢
あ町のい出ましと二葉ちの 呂什
いよの使のひいとあき 百花

夕
く

るり灯の月をくりてくく 指風
傍の懸るる多の夕それ 之室
甘言花婿くくと踏交て 翁
一度ある中二交もあるこ 考

カイ印五

六七

ふくみちのうらやま

白多

去いむ杖の影とかがれも 後昔
あうぬわこゝろふくやうり 小枝

深

まおてわきれあうらうし 酒壺
まてめてあうらうの大日 翁

寺山

をまのあうらう内をうりこそ 指雪
あまの似合て髪の長さ 大川

了

竹はけりくちの 凍ト
えちるに聞いまのまより 竹花

麻

窓へあうらう一人来とあう 嘆風
こそ抱て又せうとまてお摺子 踏小

極

何さきくわさき守屋信子 千梅
松の嵐を中腰に 文 千那
月のこれ影目とやらう哀く

百九

独抱をニワく 市巾
十んふくと月の出るまむる 柳風

、

又新しき杖の帷子 李吉
代布くまのあを打明て 天童

夕

上る大のあうらう 聖航
ふんいむやあうくま 六之

撫

あちうらう使と文と行遠 柳川
入おまうらうと月の木をうら 白鹿

夕

菘の麻を忍れを 嵐
菘ゆりゆりやめてをれ 急舟

冬

揺衣。苗玉をうらむ 百笠
のうらの汗す木爪の山乃 ヤ水

カイ印五

六

背をたてて中を候ちちり 子羽
うちを履む志をぬれは唐草ち 一故
今の山風う今う 子飛 井炊
忽ち息をあらうとち候し 深ト

□体云用云々

△四日甲 九熊義の字教より志押復用の體き
初は仍令古云一二と云ともおを替るにと
定むべく其外の初字の面をうへ八と定むべく
七と云ひ五と云ひ三の字去いたし及を寸
傍におとる面をさへるも二は許すへき
△此段に二程万通の傍にお去より面去五去
云去子の體を分あすく初云去のおり
面を隔る二去も許せよとそれて体用の
字教より初ある定むれは多候は極へき事

△三云用云信云云不極

極よ出てぬれや待す申る 支考

白タラ
キヨ

お木さ寸儀は純子と重し 匠者
使ひきくさうけて下され 小枝

あ
カケリ

孫弓控て去も旅を 楚舟
たやそらうるれいひりきり 左大

麦

意の葉を連工隠せ候をて 麦井
目もあうとくろ看板の伊達 已覚

艾帝
規

るへ合の考家来る筑下川 下
芽も立あく寸大割の材 沙花

ひき
タテ

むと束て牛も他を懐寸く 嵐雪
新かむ又と出来下ひをそ 力号

星月

何ともせぬ工為る約初 秋人
思ふおのをうかて突出寸 号
為忘工出うけり寸まお 由戸
月文のやう新地のワラ庇 記之
考より表を出寸 東郷

夏花

たすしひし加さしつむ 聖棠
訪くく江戸の島子むん 巴弓
月菜さんて奈舌友連 杖房

小弓

月夜却て川うまろく 如行
雪のわな板いしと花生の 東野
糸のきれるれ中吹れや 菊池

夏

あつらふ雲のふきすしや 菊池
花はゆかぬ人もよのより 蕉堂
雑の洞度とれはけり 一髪

杯

赤ん坊の巾着の目うらり り香
吹矢角挫て北風の奈た辰 連支
手と栗はくそく夕を り和

冬

乃終るはておる基をさる 菊池
わさめくのさる七十 十玉
年かめ寸の事とま令おほひ 玉玉

又

□二去用云
又馬 訪 飯 付 祝 有 けり 毎 成 出 入

末至立し 赤菊合知器をト

又

不又分て 返守 奈甚 菊池
久号をよとせささく 樽肴 酒香

り

ひちりききけむえのたぬて 菊池
二及通てえさきいり 残 源ト

り

又すすく依辰いなる一日和 竹松
とさるるんれい愛いさりり

冬

芝居又い吐も月の句書せ 矢旭
又知く梅の杯す年 葉志

井

治ておる松子昔も月のけ 伯楓
舟のちんきよ水いあふく 有榮

冬

ひきてあふもた室のうら 栗ル
雪屋よあふもけもあふも 玄之

元

雪ふいおし梅もきぬく 冬相
籠状おし行くをらり子

り

いやとやとやとろくをうまれ 冬相
けう末とやう戸らめをさる 末府

冠 切しやう茶漬は何ぞしをるそ
 状如を後河の飛拂交えて 占ホ
 仔細をききし梅丸の 西
 赤くむまを先州とする 里ホ
 河傍てすこを付ぬ小高 木
 林大さして採れよ中庭のむ 木芳
 日ありくく二司にあり 木
 手ごまふるのんをえりて 乃高
 赤髪をくく秋にすく 乙南
 了。西風を付くゆく 葛森
 次付するぬけくる未申 木
 腰万つ付しむ山のふ化寮 山只
 枕てあく去用を採の意付て 杜哲
 狭をくむ時を急ありよを付て 之仲
 更茶谷の花のきくよつ付も 貝家
 多敷もつ付ぬ浮世の楽をする 口通
 きめよき煮よ為化糖する 木

方丸 む月あくのいさひする家
 祈するおあの中を押れ出 嵐吉
 高の布袋の為化糖する 史邦
 からくするよ足踏をうき 権文
 する酒の濁るすすれ口ろ 八
 去付てあるふ令の梅古日 八
 あのものちぬえまうあめん 子
 二枚ある遠の年をきき 松
 梅をうり子社の宝あるきり 吉
 七つあるひう人の花もはきり 支考
 寝あつては寝てあるあり 木
 下板の端に脈をあふり 嵐枝
 ひう人の子あられよをきき 木
 高のよきと画をさしり 木
 屋店ふ草布りりて月のお 木
 丹波うり使もあくてあ 木
 押ゆのひうりてさきき 木

〆 拙業を尋ねば枝のねどれて 五五
 花むと手なる欠枝の高 正平
 三日 三月の余は泣ておやせし 支考
 春のついであふと葉の瓜お 除風
 我旅の孤をさるゝのせうにて 考
 花 花むとの竿よをき 菘 柳西
 白見 目よをぬすり香を引きて キ角
 花 出代をて杖をせりしき 浪杏
 白竹 田中の乃の通うれゆく 依く
 花 岸の糸流を通す枝の香 風泉
 花 欠る竹の枝の子を出す 年寂
 花 眉をさるゝて睡まてこし 桑常
 花 ちりくゝ古きおのあれ狩り 菜葉
 花 かくとある子の哀き枝を 口通
 花 すすきの印をさす枝のこれ 牧童
 花 泣くる兵士のつらめく行 北枝
 □二五作云

花 拙言小史中内抄 実晴古日
 花 花あより何を考へて位をむ 柳得
 花 花髪をさるゝ中のあるきよ 菊
 花 花は母の孫乃乃乃山 許六
 花 花西行もあーややく 山
 花 花多承と独活のあお花能て 峰山
 花 花んを隠すお美々 杖 菊
 花 花比の化お咄をうすりて 之乃
 花 花めつゝおよりおの出し入 菊
 花 花花およ病志の如の如をけり 不燈
 花 花言言をさるゝをさるゝ末まう 尚白
 花 花言言の情を登れりりす 菊
 花 花お母して出代の言をくれ 雲井
 花 花けあぐも考す小僧の言新 鹿元
 花 花改る様よ小玉ためて又り 酒巻
 花 花ふし人の肉の小家て大さく 菊

コハ	小去の天部未だうたふ	列字
小	小家のむ改新く産字哉	
ムウ	先振の南なきく快使	不殿
先	古あらし先く行南と舟	不殿
天	心をとくちちとるあらし	夜袖
中	お風も去の急持と情む中	キ布
友	まのまの字ん中くむのま	善卒
キツ	お守のちちも給ぬおや	りお
内	振とつる内情のまらる	り合
山	おんの内、 養すむ	杉尾
お	おん伯又きつると油揚	白根
表	花語のよめぬおの隣く	衣冠
笑	後柳のまうも笑て山花	キ角
笑	是るも集う笑止子乃	悦亭
古	古夢断くと晴屋の湖	田楽
古	たて障のちきまきと古字	可也

□三去用云 カコユ云

連るは廣行行替 情 悲 嘆 上 忍
 言 啼 喰 吹 咳 寂 障 粒 穢 智 持
 三去に去の例と尋るるもいふる

橋	意性をおろ小使の連	支考
文	及子子存のあらし連を	念子
文	後立ても連の未足守	披文
了	白身、小僧のち急の走る	涼ト
三	後急の急の列とてわら	仁行
三	さあお親とつらうを色	考
箱	箱に水もあれおま	水甫
箱	海出のおんかんけつむ	乙抄
三	たつと一夜に橋を刈しむ	犀角
三	るにえんむせんくの早	艾白
三	風より先く柳ちりてむ	伯太
三	は村の度きと医志のさうり	カ号
三	解るる杖の夕へそだく度き	

巳	カ	キ	白	小	行	カ	ま	行	白
菅州のまきかきぬをきりて	池田伊舟の杖り出せる	後らるのまきりくむむ言ひ	えのわたりも志れす是指奏	りまのせきもむをきりて	後らるのまきりくむむ言ひ	今さうして目くくく	すんくく熱もくく	祇堂おあつろれまをく	えのわたりも志れす是指奏
守珍	古大	益舟	伯老	函新	赤警	胤彦	之乃	種又	史邦
右	右	右	右	右	右	右	右	右	右

カ	キ	白	小	行	カ	ま	行	白	
後らるのまきりくむむ言ひ	えのわたりも志れす是指奏	りまのせきもむをきりて	後らるのまきりくむむ言ひ	今さうして目くくく	すんくく熱もくく	祇堂おあつろれまをく	えのわたりも志れす是指奏	りまのせきもむをきりて	後らるのまきりくむむ言ひ
白彦	林角	栄友	高石	井凡	欣園	山り	支考	北而	宇北
右	右	右	右	右	右	右	右	右	右

カイ印五

三六

白痴	飛	色園	三虫	ヤリ	ムウ	白鳥	梅お	東云
アかけの教習の杖をさすこ	ふちくくくとくくふのあ	思まきるまきるとあお篠	さういふとふるりきききき	上るあふととととととと	れもつとすよとす又も	おれははうとととととと	あせてあめよととととと	ちのちあふととととと
夕兆	嵐者	キ角	あ伝	三熊	佛毛	夕市	朱角	脚受
山祝	妻え	車仕	仲太	お枝				

信	我	イセ	喰	長	草川	吹	キノ	香却	夕
そと有るく原氏陸舟年	日とえれい旅のお篠とと	喰うう極よせうう竹の子	お喰て持ふを云も際して	初年もあるすう園子喰仕	猫をく南風ととととと	山ととととととととと	深おの席落吹とととと	あふあふの席下とととと	あふあふの席下とととと
嵐青	水村	日圓	有琴	羽松	小枝	辰化	ヤハ	楓竹	杜典
祐子	和木	水枝	有琴	羽松	小枝	辰化	ヤハ	楓竹	杜典

カイ印五
三七

ヤハ け子丁を著る磨うむ備あれ 我玉
 夕 口をよ丁そうく言砂 白尾
 夕 ちるとまふをそん言砂 柳江
 夕 降るまきくむもあう 只仙
 夕 暮もまきく言砂 折士
 夕 暮の未玉もあう言砂 折士
 夕 目もまきく言砂 折士
 夕 倭を歩てもまきく言砂 折士
 夕 何を歩てもまきく言砂 折士
 夕 先達の状は何と稗 折士
 夕 何やうせん言砂を為やく 折士
 夕 立あう何を言砂を為やく 折士
 夕 上の方のお坊は何と田の戦 折士
 夕 折るるまきく言砂を為やく 折士
 夕 何やうの夜は小類二三匹 折士
 夕 又又枝り言砂の耳干 折士

ソ 其血志くく一師の芝 牛角
 夕 晩のいそりと跡せ其葉 蓑袴
 夕 是れまきく言砂を為やく 因民
 夕 使とらり言砂を為やく 涼ト
 夕 植後くる田の中の小田 吟山
 夕 折れてくる中の戸の心 ソラ
 夕 渡りの中ちると言砂を為やく 三惟
 夕 空で折あう言砂を為やく 三惟
 夕 町中よいう社の杉 杉房
 夕 咲折るむの中より 八景
 夕 中を叩く言砂の 折合 及我
 夕 我我の中まきく言砂 折合
 夕 此れおて言砂大工の下まきく言 折合
 夕 大と是て 一日の換 折合
 夕 大庭の言砂より 折合
 夕 大まきく言砂の 折合

カイ印立

早

名籠 栴の向乃今まをくり

今 ある手今まをくる

先の手紙を今合身して 涼ト

人の笑又今まをくる

今持てまむまをくる

今そ情もまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

名籠 栴の向乃今まをくり

今 ある手今まをくる

先の手紙を今合身して 涼ト

人の笑又今まをくる

今持てまむまをくる

今そ情もまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

今起るまをくる

ア	方	白	方	揚	干	八	夕	不	炭	届	皮	時	雜	之	張	之	
言	方	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言
言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言
言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言	言

カ	イ	印	枯	冬	揚	声	三	日	声	揚	次	自	揚	次	自
カ	イ	印	枯	冬	揚	声	三	日	声	揚	次	自	揚	次	自
カ	イ	印	枯	冬	揚	声	三	日	声	揚	次	自	揚	次	自
カ	イ	印	枯	冬	揚	声	三	日	声	揚	次	自	揚	次	自

カイ印五

四二

難する人は控つて三去くと去極の境
 ありてはむも言置かれあらしおけと御之
 難する人は控つて三去くと去極の境
 ありてはむも言置かれあらしおけと御之
 難する人は控つて三去くと去極の境
 ありてはむも言置かれあらしおけと御之

難する人は控つて三去くと去極の境
 ありてはむも言置かれあらしおけと御之
 難する人は控つて三去くと去極の境
 ありてはむも言置かれあらしおけと御之
 難する人は控つて三去くと去極の境
 ありてはむも言置かれあらしおけと御之

カイ印五

五

花	幸	種	女	あ	り	春	春	六行	あ	菜州	小弓					
独 夷 一	瘦 骨 こ ま ま 記 事 カ カ カ	口 出 し 度 れ や な の 幸 彦 と	大 文 字 二 鳴 を ま る 古 漢	夕 月 を 庭 に 画 く 杖 の 風	よ ら く 女 さ く あ ら ぬ 身 の 身	い れ ぬ 人 の 家 を ま ぬ 母	姉 お お も 母 よ あ ら	あ ら ん 山 を あ ら お 母	所 定 も 只 子 供 母	春 の 月 集 を 持 つ 草 の 屑	集 て く ま る お 乃 買 お	家 あ く て 腋 紗 を ま す 淺	あ の 中 に 誰 候 を む そ	お ま お 丁 を て た い 約 む	わ ら く ま る 一 と 染 約 を 西 く	か 栗 う の 吸 湯 約 を 木 下 乃
去 末	史 部	近 仙	三 葉	言 果	源 十	仁 行	り 和	仙 呂	秋 人	支 考	牧 童	如 儀				

次句	持	あ	衣帯	小弓	一橋	千	お	ツモ	ムウ	持						
洗 拂 面 や う あ き つ る 心	哀 余 の 持 子 捨 て ま き て	扇 お 女 い な ま 持 て れ て	持 て て く ま る お 乃 買 お	花 の 江 橋 の 思 を 持 て り り	持 え ま あ ら く く 傍 仏 に	登 忘 て く ま る 一 條 の 持 衣	勝 き は 引 け り 持 て 帯 の 端	合 持 て と 合 と あ ら む の 色	空 を 持 て 眠 る 所 を	糸 の ワ ジ を 持 て 松 の 井	合 お 名 月 を い な れ 寸	新 の 輝 を お も 麻 粒	又 足 を ま る お を ま る 一	ち り 吹 お も 他 の 喜 柳	禿 敷 を 眉 を け つ む	旋 菜 陸 を り ま 草 を つ む
奈 智 子	扇	お ま お	秋 人	支 考	牧 童	如 儀	仙 呂	仁 行	源 十	言 果	三 葉	近 仙	史 部	去 末		

カイ印五 五

三良	夜	次句	小文	白風	及び	枯	お	う
一町のむすねれも侍た者 御川	三良の夜を包むありき 一	新筆子定三尋くは生束て 酒壺	又かくやう佐声うすら 嵐竹	末々口おきよくそ 天竺	おろもおろもさる 飲者 北極	去流はおとくる物(巨) 善尼	秋風や着坊持の侍あふぬ 巨海	一木の代を拵末ぬほの相 籍

考実	生	涼	涼	カク	位者	果	松実	芭	松	麦	疾		
おゆらう表は又して云泉を爰 掲呈	言撮さうんむ歩の中を爰 主要	おとをたかくあゝはて 甚二	夕日の波返つる書きくも 岱水	室園寺山麓の山内り 嵐之	什の菓を又喰ふす物日月 之乃	平足人分て之す 葉芭 菊	空人の洞をぬる古手市 嵐言	送人う己ぢやお采らぬるあ 至若	おろもぬるも 葉のゆき 黄麦	瓶も去けとあをを又ぬる 也蒙	白んおろもて押とおぬる 藤蒙	母親を又よ戻る肩人 厚席	小侍に扱て成るや不入 二

笠 市の尻乃ちを延ぶや 麻三
 疾 講沢の尻を風乃ち翁より 為丁
 歳 今ん後くつたる 冥長 車お
 尾記 障さるるも志さうなる舎者 水也
 為 志とくと流杏房の宮近 劫柳
 ヤハ 坊色を居ては比乃去 示右
 松根の今奪ふ風居て 信松
 歌 歌ぬねねと萩の裡まひ 葉老
 乙多う被取て先 申く 彦え
 キワ 初花のささみきまをばて 杉風
 ミシ 権成は居居をのそく花町 岱水
 借表 多このねをむしり新あて 号那
 各云士乃ち冬てもる痛 飛
 イセ 雪又下新る朝の足初 乙由
 時 時とく長く新る川 芳 ぬ亦
 奥 未枯の夕木は月の新る ぬり

肝大新る 身の庚申 支考
 夷新しる 居の海木 自笑
 眼を笛は吹新しりる あ伝
 痛はつれてうき世去く 口由
 うきの中を止井は海の障か 正秀
 月を許せうき栄の敷 被笠
 念うき名體を飾くまて 被笠
 天何 せん痛のせん葉はあく 日お
 長 仏腹も釣てまひも去らる 臺平
 以中は言居伴も交されと一不は入る
 □五去 辞伴云かこ五
 多子ゆき故只上は下は振居世
 新古は初陰度真社名難斤取
 白戸 幸るはある哀もする子 琴風
 年 おはるは初獲かみたり
 あ 涙又せしと打笑つ 松芳
 行ふ身を夜つ去の風 舟泉

衣も捨て種きよの中 柳里
 食もあつて厚世のお清 翹粒
 門々先くちる 杉田 相密
 裏布をまめる杉町の市 有葉
 新の産さくも古きれー衣 嵐雪
 古き衣の柏 百り
 みるの友と傍を指返 川水
 亡人と古き懐紙は昇れ 一葉
 家の家々泣きをアまゆく り牛
 鳥の泣吹乃々 樹月 小屋
 扇のおちの泣きさし 占ホ
 ばさい実の母の泣吊て 三葉
 山陰のさくも家の又ワ 片太
 口あんでうろろいんとむの陰 芝年
 ねえふの考店の陰らじ 占花
 所はゆきく 管乃陰 香谷
 月雪は梅も二度の涙は 隠え

石波糸の連うこそ 山桂
 木の木庭町の奥よ三弦 五桐
 板敷の是より奥よ家度友
 奥の世並い 在子の作 翁
 大工もこの 奥よ 中
 ちやこの石 乃の祀家 方尾
 雪さくもさりくさる 社山 一
 雪のよよまのう町 三位
 杉のさけり 家中の葉屋 相
 柱柱て小枝よむのえを記 更せ
 うさくゆのるまよ奥のえを 翁
 山内よ今似やとなきいそれ 依
 くらく負ゆる名不乃具人 友五
 下この妻仄あるむの孫 仙化
 款ま束るむの松の声 千り
 梅そ影の群る方い玉何 香沾
 土壘の粒もはるむの 沾不

カイ印五

奥

舟舟 舟舟 舟舟 舟舟 舟舟 舟舟 舟舟 舟舟 舟舟 舟舟
 斤 斤 斤 斤 斤 斤 斤 斤 斤 斤
 反 反 反 反 反 反 反 反 反 反
 信 信 信 信 信 信 信 信 信 信
 功 功 功 功 功 功 功 功 功 功

□西去用云 カキコロ

東道位笑照是極州眠是就居は十示熱
 字の凡何しと西とててる句も七八もあつて
 ▲西字の多用あれ二去入へり徳西去共凡
 十去已上文中多用のおい五去已上之
 去を遣追也去遠通 遊揮掃
 投搜控拔押插條消汲洗濁信
 洗你淋位眠是極荒思忘急
 惡惜憎恨忍昂強飽欣棄定寄
 終獲神猪 列初被高召向笑

呼吐突齧符登弱粘耻作備作
 飛語誘漢誘養賣賞賞貸
 盛盜乱上是お州 離果極枯境
 破起 後隱早氣自初干疎喘
 出来仕也 協り 劣り 嗅

ヤハ 山も忘の徳 梅末て 又不
 九 宿きく入おとつく 云水
 所 所 所 所 所 所 所 所 所 所
 地 地 地 地 地 地 地 地 地 地
 雑 雑 雑 雑 雑 雑 雑 雑 雑 雑
 入 入 入 入 入 入 入 入 入 入
 手 手 手 手 手 手 手 手 手 手
 百 百 百 百 百 百 百 百 百 百
 是 是 是 是 是 是 是 是 是 是
 所 所 所 所 所 所 所 所 所 所
 言 言 言 言 言 言 言 言 言 言

次句 彦彦 君士とておぼき月 才凡
 深 又深し新改の玉 如行
 真 淋しき車備もせき 柳 呂丸
 夜 ちる所のきも淋きむの奥 和吹
 歩 程家さしきるの云 和吹
 拾 けり守るおのまきひり 和吹
 拾 細工よせし車さきひり 和吹
 拾 たるを求く時さきひり 和吹
 拾 草深掃て困さしき 和吹
 拾 半部清の行をほ出す 和吹
 拾 黄砂の舟出雲のあやむ 和吹
 拾 せきおほはるまきのをさけ 和吹
 拾 ぼくして志すの苗果はゆ 和吹
 拾 する上は眠る星のゆつく 和吹
 拾 眠ささのまをめるけり 和吹
 拾 一眠して 情のひり 和吹
 拾 秋乃 黒のさあひておる 和吹

次句 痛ふとえさるる者いそ 竹松
 次句 下しは林をさす 丸
 次句 藤定化てきの藤は根はゆる 角
 次句 おの原さく藤さるけい 角
 次句 新地の布日足あつる 更前
 次句 香具心の高路の太も足 如柳
 次句 先はさそくあつる 藤 日 甚二
 次句 ちのらんを花飾の志さる 甚二
 次句 青もあき足はま月の志さる 和吹
 次句 庭はあき作る志の志衣 和吹
 次句 小神の粘の志さる志衣 ソラ
 次句 為月お麻の衣の教法 史邦
 次句 押は仕付る志の志衣 海玄
 次句 芳の志あつる神の志衣 和吹
 次句 花の使者も志入る 和吹
 次句 和吹の使者も志入る 和吹
 次句 志あつるも天下を平 二

尚 牛ふれうして定まるし 吾伝
 志 きむは盃版付を志りり 吾伝
 惟 志すよん傳るる 弓 吐 鹿
 志むいともく久矢の撫きよ 峯白
 志を志ぬるる山の先 宇中
 志人あるきて持てる志草
 志の志よむの枝音 東お
 志るる山の志乃むの鶴 反架
 志きくくもつるある志 一松
 志るる山を吹れり志りき 松芳
 志の志の志をききるこ 力多
 志より乳母の志の志 甚三
 志もあ便すおきし情ん 汎山
 志ううでい志の上を志情ん 行巻
 志さうも情ん 船 改 杜草
 皮 恨て 肩へくする小あえん 口松

恨 云月を多ふとせと打恨 涼ト
 次白 双巾披下ておの雲踏の志言 方丸
 志 登箱の人の志てあるこ 牛角
 志 志の志を志る情りく 一
 志 文よりひより草を志るや 扇書
 志 月おを嬌ふ人もおろろ りお
 志 自れと嬌ふあまの喚 汎丸
 志 夜吐のまきと飽ぬ大待や 广三
 志 程度ももちと互を任飽 和
 志 正気おのむ風の物さよ 岱水
 志 身合の志上戸まで吹明し 嵐之
 志 文のお病の志を禁する 井深
 志 志すすくおまの志す 和
 志 夕空のぬおの志の由 乙お
 志 志るる志の連も志る由 乙お
 志 志るる志の連も志る由 乙お
 志 志るる志の連も志る由 乙お
 志 志るる志の連も志る由 乙お

カイ印五

五

夏仙 尾のひれも種跡さぬ者喰 万鳥
 孫 ま苗もつんと植ゆる虫
 豆 お焼く日あつたを枯合 せ隊
 孫 傳説く家横舟乃五云渡 在支
 子 空拂よき月の神乃一のみ 住子
 神 陽をさるる雲の神能 ソラ
 冬 ねぢの神乃の白あき ト玉
 皮 黄時を横し能る月神 一
 毛 下の後より子申よサ新 口括
 毛 今結く髪を換ふワヤ志 源ト
 毛 結をて細糸くぬむの極 木言
 毛 髪結て書よ出る月お月奴 イ指
 毛 去風よ衣法結よ机申よ 雲翁
 毛 梅信よ小家結る給言虫 尺竹
 毛 万能も只一人の列の果 甚二
 毛 列の純子のおえよ森をこれ 垂平
 格白 まさ生列の 乃乃試 深紫

マノコ 何の傍きも喰列の林 以節
 ソ 何初の智の口供にたれつる 之乃
 赤 奏初しん 壬生の念仏 夜夕
 赤 新し梅を踏 初りし 世竹
 白 咳初を思ふ候も控さす 三翁
 白 後く徒士の初く袖を 彫業
 白 予解くあつる志あり引被 一
 山夕 高にすれり女に氏士の身 六之
 高 高に仕を控ふを徒りて 一
 高 角はえを人の指を石連て 下
 高 ありおのねりし石控よ 圭角
 高 まつと川の向の友木を 月ね
 高 檢事の向をよ履せて 梨月
 水心 月すつるものむう元山 杏石
 水心 まおむうくうもの今 急白
 水心 いかをまの笑えよと難房 七石
 水心 笑て嫁乃る笑へ世四く 石石

衣 形の身とむ人と笑ふ 南木

笑 衿に笑ておろ上御尾 車志

笑 幸とけつて笑ふ田 彦平

笑 笑ふ竹も笑まぬんう 伯老

拾 何れそりつゝも笑ふて 甚二

拾 版でせきき田舎こりう 菊

拾 笑の葱くらふ人の嘆きよ 力分

拾 種人のお慶くそを海て 里木

拾 ねれと旦那と妹くまふも 一

拾 ねれもそりくおろ後て 資白

拾 肉もさきて笑ふ古朋孝 整原

拾 あのん中も堂の山は世あり 彦支

拾 某掃てお高の虫吐 胤山

拾 振と吐志んくきく 杏色

拾 卒ききくも小志の世合 ヤハ

拾 思の喜乃葉戸と実徳 三翁

拾 一空を

水仙

笑

呼

笑

笑

拾

笑

カイ印五

共六

著 著 著 著 著 著 著 著 著 著
 作 作 作 作 作 作 作 作 作 作
 ちんくと地味作が一人 車角
 言 悪の縁よ細作て 相学
 花の香る古き部町作 ソウ
 夜ハ作。 三月の掃 小枝
 坊イ作。 所ハあるね三月 呂仙
 控ちくさちして巻の作松 吉次
 自の物の比を借て草抄 梅芝
 在をう上三を借て信袖 仲志
 望うひ夢の返るに簾中 史邦
 かし 屏風さうす夕丸 杉風
 糸借上草の戸出る 抄巻 翁
 自とて汗に控る葉借く 重辰
 他とて牛の字お守お朔 一相
 掃とて口ひて言葉をさる 扱市
 風事^ウ 巻を立ち一 走飛する 三羽
 志 凌虚む食列衣紙を飛付て 去芳
 捨 不踏返守飛杖の目 一ラ

次 次 次 次 次 次 次 次 次 次
 句 句 句 句 句 句 句 句 句 句
 手ハ抱はは考あて飛ふ桂 五英
 勇ハ末て新と借る 時を 基角
 先犯をさるる 喜のお 借 扱水
 龍志しは幸傍をい誘和 曲字
 廉笛吹て誘出さうり 不有
 美ハ併て流せつらま又の 是汁
 玄砂の敷る身のもの方 支也
 上まて冊子の画をせよる 舟泉
 曉ふくく控等品 小ひ 力守
 たが待りやうとあまにワ 聖風
 金持を待る人ひひくく 費仙
 字よりおら姉のそく人々 佔徳
 自をさけくおく又これ 文桂
 教をさるるをうくくあん 一字
 何ちをさるるをうくくあん 一字
 うりよさく移世おら哀うて 乙お
 ち美の後姿のおもをさき 正長

長ラ 月むらり 賞さ ねり 妻よりて 重平
妻 室持て ねれ こと 春後 妻 かり 取
さき 妻さき 喰ねて 仕とく 豆腐店 一字
いあ かり かり 候もあ 依角
小弓 何 夢 出で 坊の 子 けり 眉川
買 月 舟の せ 賞 あり 舟泉
あ 長持 夢 入て くる やき 舟泉
、 如月 や 晒を 夢 入 扱て あり 冬 又
、 賞うと 茶 入 あり の 燈 出 豆考
、 苗代 の 假 借 あり 人 賞 笠 在
、 印 あり 夢 入て 入る 山 中 こそ 夢
、 賞 本家 の 子 苗 夢 入る 姓 為 子
、 深 携て 夢 入る 夢 入の あり 淋 晒 夢
、 夢 ば ね あり 夢 入の あり 淋 晒 夢
、 夢 立横 夢 入て 下 戸 あり 夢 入の 候 栗 入
、 夢 小 船 の 例 あり 夢 入の 候 栗 入
、 夢 儀 承 あり 夢 入の 候 栗 入 占 亦

盛 けの 実 あり 夢 入の 出 盛 入
、 你 目 盛 あり 夢 入の 声 あり 夢 入
、 新 夢 入の 夢 入の あり 夢 入
、 印 文 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 皮 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 高 白 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 乱 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 フリ 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 拾 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 夢 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 山中 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入
、 夢 夢 入の あり 夢 入の あり 夢 入

後 川 一橋 祖 一橋 果 有 二日 極 八へ 次 枯
 蘭を川上へ門を弘く 水川
 川あり時の爪を庚丁む 雲水
 六月の船橋なる玉ありて 信風
 月舟の舟橋廊の草州一 夕花
 村をまあるて小家一軒 林紅
 影をまあるて人を子稚 風
 乃をまあるて世を子孫の流る 風
 布子まあるて布子まあるての果 水胡
 川向あはれ使もまあるての 侃如
 いせ備の果いりてまあるての 畜不
 川のあまあるて田を極て ソセン
 極をてまあるてち極を極て 伊良
 神の領極をまあるてまあるて 桑柘
 くまあるて桑を極ておく 菊
 哀もまあるて桑を極て 菊
 枯ゆへ病まあるてまあるて 牛角
 松茸まあるてまあるて 揚水

ヤハ 破 葦 破 山 中 松 白 夕 夜 物 極
 いりてまあるてのうらめ枯枝 方凡
 浮世のむと合の草文あり 初始
 身はまあるて勢を極てまあるて 崖水
 笠をまあるて衣の破つりあり 相葉
 破つりてまあるてまあるて 桑柘
 むくまあるてまあるて 梨
 きりまあるてまあるて ヤハ
 去けるまあるて山をまあるて 涼ト
 起てまあるてまあるて 万子
 引起すまあるての尾やおの月 文章
 とまあるて舟まあり起すまあるて 文章
 具足のおまあるて 乃九
 女房の令て起すまあるて 乃九
 五月まあるて小社の橋も極て 乃九
 博小の初まあるてまあるて 乃九
 松の極てまあるてまあるて 乃九
 極極極極極極極極極極極極 乃九

カイ印五

五

者 疎よりそれてちまのふり ちむ
 有り ちむあくさう誘ふあり神 菴舟
 は ちあわしく九条あつるの草の声 支考
 梅実ありく今の他社 菴舟
 家子何きわい文た字を扱とせよ拾きの動字
 面去よあぬ七ビクソクグの傍ありと同日去と云
 系字何あぬ強情も何とらるよ但お
 似る初まも我い年あふるをう二う二う
 系はちあれ面去も可あむとさあせよ

□西志辞体云

・下八まま上

ちりりさうさていつくいまちや先程必
 皆け計安とこそちよきあえ初おあ後
 横まへり西東化僻俄仮以役役
 番際及れ献香信教昔及留と
 世中後世自由美理 穢嬌 多き
 あい 云おきの月又中あうらう 其一人

古り 後ふりりる 今二万両

七き

さりとい候 袖よせきあけ 朴人
 さりとて 穂人日く香の月 之仲

言白

きらねは 拾は 珍の比あれ 所言
 さうあつむ ちる年の 之は 乃九

中

ちりり 畑よさきも 草のむ 乙由
 是いさてよんおき 草葉 自笑

白

梅よととやうさき 梅花 匠者
 是いさて 俄きさの 林のれ 支考

白

隣のをいりも 十八 林ぬ
 地よあつものうりも 八石 竹窓

白

今のちりり 我に及さう 一拾
 ちのちりり 啼ぬ鳥の 我思う 三拾

拾

江戸梅心通をむ 我所る 偈子
 珍の草の 我つちむ 又とて 三拾

白

蔓

イニ

所のじ狭のいなきひき
いよあくつら吹矢を夜き

相葉
菊

百九

ハ

七夕。よせいもや お白
そやきうらも 祇屋はあ

赤水
舟帆

おかきあゆむ成る月のあ
そや喰てある二日月の影

支隊
天宮

おと下往て来るもよきあま
と名之ともそや日あきまの書

二々
朱函

そむもそや揚ぐい火を灯し
先老僧の山月よりうら

松友

そむ先老僧の影はまきま
笑ひひ このよきおむそや

涼十

と今合のあ乃先いあ入
先い望むも 川向く

支房

先十人のそむ出来たり
そあ債の思乃報も子

一同
子結

梅

三

時をあら山崎に於
陸の人の必くせうあ

蓋村

三

あ人あきうらも 必
梅の時皆慰ああれり

林角

三

あ人あきうらも 必
あはよあきうらあれり

梅二

三

あ人あきうらも 必
あはよあきうらあれり

梅三

三

あ人あきうらも 必
あはよあきうらあれり

梅四

三

あ人あきうらも 必
あはよあきうらあれり

梅五

三

あ人あきうらも 必
あはよあきうらあれり

梅六

三

あ人あきうらも 必
あはよあきうらあれり

梅七

三

あ人あきうらも 必
あはよあきうらあれり

梅八

カイ印

六二

山ト 兀ていそれとさちの山く 聖業
 コチ ありくく響つく時あつく 巴兮
 三日 町くもあつくまふ大陸南 除風
 コ 木架極そくくけ 俗 升炊
 小ウ 吉ふくすあつ時どこの陸 風玉
 ドコ 百友やどその寝てき子出 東響
 フコ 片をいされいよその扇 日圓
 ヨリ 利されい衣を山よきこんて 事水
 望 あの杜いよきよききり 空柳
 願 美きよあれとよその批巴く 和友
 拾 今仏を誘くよその入お 香粉
 不 林空く哀と拾ふむの売 夕葉
 茂 若星も哀こえあつ態世及 口通
 炭 六日月ころんくそ哀あれ 支彦
 願 頗憐の哀い又よ空りて 仙雅
 三 初丁よきを下地おて又る ヤハ

初 初午よ女扇の親子拾て 菊
 妻麻 乳を子持よ初の聖具 回牙
 冬 二人う二人いせを初縁 如朴
 又帝 初雪のそくも権えて海り ヤ水
 ソ 風通ふ氷室の外へ響よ ト玉
 豆 外よ掃て智ぬ大を陸 嵐雪
 赤 におの日和さする月の照 在支
 後考 質よさるくもさぬ豆赤 和
 皮 打ふせくろ 響あれ 卯七
 皮 若う上戸の歌多りあ 乙掉
 豆 福山の及い道有さるあ 落中
 豆 手杵も内よそめああ 燈え
 豆 万ののけ開も黙る名新あ 汲言
 豆 一時も今のうらりのおえ 伝徳
 豆 響おの後の空のおさくして 彫業

一栞	更尺限多門 <small>（手木）</small> 之横立て	伝孝
横	後保 <small>（い）</small> 之横町の寄	菊
一き	あつ陽を遠く来乃白浪	
末	おののあつしきあつの末	
ツモ	月の林をうらまう哀く	如風
	花の妻来一返 <small>（か）</small> より	素雪
十七	へりをくると降る丸茶	巴人
（リ）	ちくやおく白く降り	丁山
言分	西文の二社の是さく	水開
西	西谷 <small>（東）</small> 谷し	梅因
北窓	東屋より西屋の事	松碌
東	丁南 <small>（北）</small>	東の月
森者	はば毎うあ <small>（の）</small> の	キ角
又	すか <small>（う）</small> 古き卵 <small>（い）</small> は	り斗
八幸	瓦を後お <small>（の）</small> の	晋如
名	神 <small>（向）</small> も南无 <small>（口）</small> を	あ士
庵せ	あつあ <small>（工）</small> 貨種をむ俄 <small>（る）</small>	た月

俄	俄歴志の作も手作	文先
ひさ	月待て候の内裡の司 <small>（る）</small>	孫石
板	板の拵 <small>（は）</small> む <small>（う）</small> 会 <small>（は）</small> 仏	
斤	菜の戸 <small>（納）</small> 戸知 <small>（比）</small> 拵 <small>（く）</small>	翁
比	意自 <small>（の）</small> 暫 <small>（は）</small> は <small>（ふ）</small> 比	享子
三日	朝 <small>（は）</small> 比 <small>（の）</small> 程 <small>（あ）</small> く <small>（む）</small>	除凡
	け比 <small>（は）</small> 花も咲く <small>（と）</small> 云 <small>（来）</small> る	
万勢	り <small>（は）</small> 比 <small>（は）</small> 乃 <small>（ち）</small> 冬 <small>（枯）</small>	凡守
	献 <small>（立）</small> は <small>（太）</small> 多 <small>（る）</small> 工 <small>（又）</small> も <small>（花）</small> の <small>（比）</small>	杏王
水仙	お <small>（信）</small> 子 <small>（喜）</small> ふ <small>（比）</small> の <small>（美）</small> 楓	ヤハ
	の <small>（よ）</small> る <small>（薄）</small> 代 <small>（男）</small> の <small>（む）</small> の <small>（比）</small>	急白
梅+	態 <small>（お）</small> の <small>（毎）</small> の <small>（り）</small> も <small>（つ）</small> く <small>（比）</small>	梅芝
	け比 <small>（は）</small> 程 <small>（乃）</small> 化 <small>（る）</small> 性 <small>（く）</small>	り雪
山夕	お <small>（孫）</small> を <small>（す）</small> れ <small>（九）</small> 換 <small>（一）</small> 格	六之
拾	ち <small>（い）</small> 信 <small>（は）</small> 子 <small>（を）</small> を <small>（格）</small> り <small>（て）</small>	
後	陽 <small>（多）</small> は <small>（田）</small> 舎 <small>（役）</small> 志 <small>（の）</small> の <small>（事）</small>	世以
	陸 <small>（走）</small> の <small>（役）</small> は <small>（ね）</small> あ <small>（ち）</small> る	去末

カイ御止

六

艾澄 教多れて書の名を日も永く 付板
 バン 其の二三人は種をうくるく 紫ホ
 今 何れも其を三を仕られ 柳
 居あつたれりし者 柳
 石の弁也云る出甲十 甫什
 氷毒と云てふぬきこれ 甫什
 小月九書の申む字は及 甫什
 山夕 多うい言句も一寸障あり 衣靴
 行名も珠おやの店の障あり 栗ル
 拾 今のりう何れをさく 一拾
 万 豆鼓志うも定万の月 木言
 多た 八部のれいそく仕色多 木言
 知 手れは小き叔未供さきて 菊
 名却 川流をさるあやの献を 芙蓉
 シ 手拍次方子何い 三 献 母丸
 ソコ 賞ぬ香具の手も梅色 巴青
 カ むのまう及まぬ山を打眺 鬼士

小文 初一本を稿の去き信 菊
 質 タくれよえと質と投込 岱水
 你 影の卵の敷を春を 柳
 教 多うい言句も定万の月 木言
 仇あぬ 月いむりの親父友連 菊
 著 昔掉今の帯の心付 信季
 哉 昔性せぬ 入おろあり 儀方
 ヤ 昔の陸 古池はあく 淫之
 ヤ 整の布いも其昔も 扇葉
 只おまの何れも世中浮世の面去 照又よ 子正
 白戸 移度又い言句も小刀是 膳足
 原 何れも笑てきた親父 柳
 張形 方丈の寸い跡及よとされて 茂杖
 首 今あすと旦那の寸と味く 乙子
 柳 志不も徳居の寸と味く 茂阿
 志ねよと尾の寸と味く 危松

カイ印五 六五

え衣	二る十日も暮るふよの中	文河
帯	ト社中よ仏の體よ懐い候し	松五
山	あつれて浮世をほろ元天宗	橋本
山	今の浮世よ心いれさうぬ	原ト
梅十	井戸の自由と人のうらやむ	り死
島	原を交ておの自由さ	呂杯
三島	後々浮世の美程のち糸	為翠
キリ	すくぬ美りを母の氣配	奈株
梅十	代友の友もあはれいふきんむ	甚二
まゝ	母親のきんむを菓子で付て	仲志
梅山	風流てりき若やおのり日	松宇
十幸	は舟舟と身よむ程のなりと	由殊

はきの空の字教指合の大業と未だぬ虫あり
 何いそきるあう後天難き古例をいえは
 きを減する字教あはれいふまき其まをりて
 けさうを補のくう

梅印録五終

